

## 始業式あいさつ

皆さん、改めて、こんにちは

さて、いよいよ今日から平成25年度が始まりました。

まず、最初に、私の坂戸高校に赴任した時の最初の印象を話します。

着任以来、何人かの生徒に遭いました。一人は、明日行われる「お花見祭」の実行委員の生徒です。「お花見祭」は新入生オリエンテーションとして行う部活動紹介のことなのですが、そのパンフレットにのせる「校長あいさつ」の原稿を依頼にきました。とても礼儀正しく、要件を丁寧に説明してくれましたので快く引き受けました。もう一人は、部活動の定期演奏会に載せる、やはり「校長あいさつ」を依頼に来たのです。やはり礼儀正しく、丁寧な説明してくれ、もちろん引き受けました。2人とも期限が迫っているということで、翌日の締め切りでしたが、約束通り翌日原稿を取りに来ました。どうにか印刷に間に合ったようで安心しましたが、この二人とも、「あいさつができ、相手に礼を尽くして要件を的確に伝える」という、コミュニケーションスキルがしっかりと身につけていました。私の坂戸高校生の第一印象は、登校する生徒さん達の明るく元気な姿の上に、この二人を通して「あいさつがきちんとでき、コミュニケーション能力が身に付いている」というものになりました。

しかしながら、気になったことが一つあります。それは制服の着こなしです。せっかく良い印象を持ったのですが、あいさつ回りで登校してくる生徒の姿を見かけましたが、男子の上着のボタンはずしや女子のスカートの丈の短さが気になりました。これは、私が校長であるからではなく、皆さんの姿を見た市民や第三者の方も同様に思うことではないかと思えます。つまり、人は接してはじめてその人の人柄や考えがわかりますが、まずは見た目で判断されることが多いということです。皆さんの良さが、見た目で判断されているのです。ノーベル平和賞を受賞されたマータイさんではありませんが、「もったいない」ことです。お互いを思いやる心を大切にする意味からも、坂高生としての自覚のもと、まずは制服の着こなしを意識して学校生活を送って欲しいと思います。

それでは最初ですので、皆さんに考えていただきたいことをお話したいと思います。

第一に、「自分の限界に挑戦してほしい」ということです。

女子マラソンで活躍した高橋尚子選手の話をしてします。2000年のシドニーオリンピックのマラソンで優勝し、翌年のベルリンマラソンで世界記録を樹立した日本を代表する選手です。マラソンで日本人女性が世界記録を出したのは彼女が最初でした。彼女は学生時代無名でしたが、小池義男監督との出会いから才能を開花させました。彼女は「ただ勝つことではなく、自分の限界に挑戦すること」と、それまでの目標から一段上を目指すものに目標が変わっていったのです。しかし、その彼女も連続出場を目指して臨んだ2003年の東京国際女子マラソンでは2位で、残念ながらアテネオリンピックに出場することはできませんでした。その敗因となったのが、「あの坂」といわれるスタートから39キロ地点にある上り坂でした。大会関係者からは「あの坂を制した者が大会を制する」といわれた坂で、高橋選手はスピードがみるみる落とし、エチオピアのアレム選手に抜かれてしまったのです。その高橋選手は2年後の同大会で見事に優勝を果たしました。その時のインタビューで次のように語っています。「陸上はやめようかと思ったことはありませんでした。でも、一度夢をあきらめかけた私が結果を出すことで、いま暗闇にいる人や苦勞している人に、夢を持ってばまた必ず光が見えるんだということを伝えたい。私はそのメッセンジャーになるんだと走りながら自分に言い聞かせていました」と。この時の高橋選手の本気の気持ちは、「坂に勝つことではなく、自分に勝つ

こと」だったのではないのでしょうか。実はこの大会の直前には永年指導していただいた小出監督の下を離れ、「クラブQ」というチームを作り、自らを厳しい環境に追いこんで望んだのです。いま本校には、「チーム坂高」というという新たな校風があります。生徒と生徒、生徒と卒業生、生徒と教職員・保護者が一体となって、互いに協力し合い、支え合いながら勉強や部活動、学校行事で切磋琢磨する学校風土が生まれています。このよき風土を更に確固たるものにするために、今年は皆さんに、高橋選手のように、もう一步を踏み出して、坂戸高校の「坂」にちなみ、自分の坂を越える、すなわち「自分の限界に挑戦」する取り組みをして欲しいと思います。

もう一つは、「小さなことをコツコツと積み重ねて欲しい」ということです。

今年の春の選抜高校野球は、埼玉代表の浦和学院が埼玉県高校野球界の悲願であった優勝を成し遂げました。投打のバランスが取れたチームで、見事な優勝でした。甲子園の常連であった浦和学院は全国ではなかなか勝てませんでしたが、2年前の東日本大震災が一つの転機になったようです。浦和学院野球部は被災地支援を続け、東北の子どもたちに野球を教えていたのです。その支援を通じ、逆に自分たちが多くの人たちによって支えられていることに気付いた部員たちの練習に対する姿勢が変わり、日本一練習量の多いチームになったのです。練習に裏打ちされ、精神的に余裕ができた選手たちは実力を発揮して勝利を掴んだのです。

浦和学院の話も素晴らしいのですが、ここでは2010年に春夏連覇した沖縄県の興南高校野球部の話をします。興南高校野球部には秀でた者は一人もいませんでしたが、ゴミ拾いと「魂・知・和」(こん・ち・は)の精神で逆境を乗り越え、全国優勝を果たしました。弱かった彼らは、まず「日本一のゴミ拾いができるチーム」を目指し、小さなことを毎日繰り返すことの大切さを学び、甲子園での優勝を果たしたのです。彼らは毎朝ゴミ拾いをするために、時間厳守で15分の散歩を行いました。散歩中は誰にあっても大きな声で挨拶し、「魂・知・和」を合い言葉としました。「魂」とは何事も信念を持って取り組むこと、「知」とはたくさんの知恵や知識を身につけること、「和」とは仲間の信頼や協力を得ることを意味します。続けて読めば「こんちは」という挨拶になります。「魂・知・和」の精神で小さな努力を毎日続け、日本一になったのです。

併せて、皆さんに「時を守り、場を清め、礼を正す」という3つの小さな実践をすることを勧めます。「時を守る」とは時間を守ること、「場を清め」とは掃除をすること、「礼を正す」とは挨拶をすることです。時間を守ることで人からの信頼を得ることができ、掃除をすることで心が磨かれ、謙虚で気づく人になれば、挨拶をすることで人間関係が良くなります。今年は、この「時を守り、場を清め、礼を正す」の上に、「魂・知・和」(こんちは)の精神を皆さん全員で取り組んでもらいたいと思います。すなわち、「魂」として=「時を守り、場を清め、礼を正す」に信念を持って取り組み、「知」として=たくさんの知識を身につけること、「和」として=クラスメイトや先生方と協力して、部活動や文化祭、体育祭などの学校行事など、自分たちができる教育活動に精一杯取り組んでもらいたいと思います。

最後に、ごみが落ちていたら拾い、身の回りをきれいに保ち、興南高校野球部と同じように小さな努力を積み重ねて、「文武に優れ、世界に羽ばたくリーダー」の育成を目指して「日本一気持ちの良い生徒のいる学校」となるようお互い努力していきましょう。